

二つの古典

月村 辰雄

ヨーロッパ諸語で古典といえば、クラシック。もちろんラテン語クラシクスに語源を仰いでいるが、この語がローマ時代にはまだ古典という意味合いを含むに至らなかった点には、十分な注意が払われてよい。

クラシクスとは、本来、さまざまな社会階層（クラシス）の中でも上流市民を指す言葉であり、転じて用いられても最上等の著作を意味するのがせいぜいのところであった。このラテン語がおそらく十六世紀の後半にフランス語の中で使われ出し、そこからイタリア語、英語、ドイツ語へと広まったわけだが、そうしてみると不思議なことに、新しいヨーロッパ諸語のクラシックは、古来から伝わる永遠の価値を持った模範的な著作という、まさに古典を意味する香気あふれる語へと変貌を遂げていた。

この間、いったいなにが起こったのであろうか。ルネサンスという変動の時代と、ギリシア・ローマの作品の再発見のことが思い合わされるのはもちろんだが、私などはその中で、教育制度の変化に目をつけている。つまり、近代のヨーロッパに古典が成立するにあたって、いわゆる学校のクラス制というものがずいぶん大きな関わりを持ったのではないだろうか。

同じ程度の学力の学生を集め、易から難へ、一歩ずつ階段を踏んでカリキュラムの到達点へと導くクラス制の起源は、実は意外と新しい。それは十五世紀の後半、オランダを中心に栄えた共同生活兄弟会経営の諸学校で試みられ、十六世紀に入ると、パリ大学など、従来の大学の学芸学部の中や、またストラスブルールやジュネーヴなどのプロテスタント系の学校に採用され、世紀後半には、イエズス会のコレージュ（中等教育施設）がクラス制というシステムの上に厳密なカリキュラムを組み上げるに至った。

初め社会階層を意味したクラシスも、クラシクスとほぼ同じ時期に衣替えをしてヨーロッパ諸語のクラスとなると、学級を指すのである。ところで、ここで問題となるのは、クラシックが、かなり早い時期からクラスで用いられる書物、つまり教材、をも意味している点であろう。この語義は時代を経るにつれてかなり優勢となったようで、たとえばフランス語では、十九世紀半ばのエミール・リトレの辞典のクラシックの項に、「かつて最上等の著作を指したが、現代では多くの場合、教室で学ばれる著作のことを示す」という注記が施されているほどである。

実際、二百年の間変わらなかったイエズス会の学則の、各クラスごとに指定された教材に一瞥を加えてみるとよい。そこにはアイソポスの『寓話』やキケロの『親しき者への手紙』に始まり、ウェルギリウスの叙事詩やデモステネスの演説に向かって、易から難へ、いわゆる古典が教材として並べられているように見える。しかしながら話の順序はむしろ逆なのだ、と私は思う。

それらは、まず、十代半ばの少年たちの興味を掻き立て、資性の涵養に役立つと判断された作品なのである。また、それらは、たとえば「ウェルギリウスの『アエネイス』からはカルタゴの女王ディドーの恋の激情を描いた第四巻を除く」という学則の但書きに見られるように、少年たちの劣情を刺激してはまずいという配慮の上に立つ細心厳密な選別作業によって選び出された、いってみるなら健全この上ない作品なのである。そして、人間の普遍的な感情と思想を盛り込み、人生の目的と諸価値を肯定的にとらえるこうした作品群が二百年の間、ヨーロッパのほぼいたるところで教材（クラシック）として教えられるうちに、やがてクラシック（古典）として定着し、私たちの古典観を形成するに至った、というのが話の順序であるのだと思われる。

ところで、それなら、クラス制が定着する以前のヨーロッパ中世には、いわゆる古典というものは存在しなかったのであろうか。

微妙な問題である。だれでもが人生の門出に読んで人間の可能性に奮い立ち、人生を振り返って読んで一生の意味を噛みしめる書物という意味であれば、なかったといえる。

しかし、その一方で、少なくとも学問に志すのであれば、だれでもが読んでそれを出発点に議論を組み立て、その中から論証の材料を引き出し、そのテキスト

を真偽の判断基準とする。そのような一群の書物であるなら、あったといえる。聖書と教父の著作もそうだが、私はとりわけアリストテレスのことを考えている。

ここでまた、教育制度に話を戻さねばならないが、中世の大学には、神学、医学、法学という上級三学部と、その前段階に、中等教育課程に相当する学芸学部とがあった。この学芸学部は、ごくおおまかにいって、アリストテレスの著作のうちでも『オルガノン』と呼ばれる一連の論理学書によって論証法を習得する課程、と置いていただければよい。

中世の学芸学部がクラス制を取る必要がなかったのは、論証法という、いってみるなら一種の実践技術を教えていたからであろう。学生は、まず『オルガノン』の講義を聞いた上でバカロレアという中間段階の試験を受け、次いで『オルガノン』のうち知識論ともいべき『分析論後書』や、同じアリストテレスの『形而上学』『倫理学』などの講義を聞いて、リサンスという学芸学部教授資格試験を受け、その技量のほどを示せば学芸学部の課程を修了できた。

教師の講義の眼目は、カエスティオー（問題）にあった。教師はアリストテレスのテキストから真偽の定かでない命題を設定し、まずそれを偽とする論証をいくつか展開し、次いでそれを真とする論証もいくつか展開して結論を述べ、それが真と決まれば、最後に、先にそれを偽とした論証の一つ一つを自ら反駁しつつして証明の幕を閉じる。いわゆるスコラ学の論証法であるが、教師の人気は、真にせよ偽にせよ、どれほど沢山の論証を繰り出せるかという点にかかっていたらしい。

ピュリダンという、十四世紀初めのパリ大学の教師がいる。飼葉桶と水の桶のあいだに立ちすくむロバのパラドクスで有名な人物だが、彼はこのカエスティオーの名手であった。彼の講義録は、十六世紀に入ってからでも繰り返して出版されているが、今、その『形而上学』講義から例を引くと、第一のカエスティオーは「形而上学は最高の学問である」という命題をもとに展開される。ピュリダンはまず、アリストテレスの『政治学』や『倫理学』まで含めた著作から引用し、それをもとに厳密な三段論法によって七回、「従ってアリストテレスによれば、形而上学は最高の学問ではない」という論証を繰り返す。次いで同じ手続きによって、今度は「最高の学問である」という論証を七回

繰り返すことになるのだが、ここで注意したいのは、すべての論証がアリストテレスのテキストの枠内で遂行されている点であろう。アリストテレスのテキストは、論証の材料であり、判断の基準であった。

つまり命題は、アリストテレスのテキストに即して真か偽か判断される。ということは、学芸学部の論証法では、アリストテレスのテキストが真か偽か判断できない、というより、誤まりが混じっているなどとは思いつきもしないわけであるが、これがその上級のたとえば神学部に進めば、今度は聖書をアリストテレスの代わりに用いた論証法の訓練が始まるのであった。

いっさいの材料を提供し、いっさいの基準となり、人がつねにその枠組みの内部で思考することを余儀なくされるこうしたテキスト群は、クラシクス（古典）というより、中世の用語法でいえばアウクトリタス（権威）という名で呼ばれるのが普通であった。ところで私はまったくの門外漢であるから、こんなことを口にすることを憚らねばならぬのだが、仏典であれ、儒教の四書五経であれ、それぞれの教団の内部では、テキストはこのアリストテレスや聖書のように、アウクトリタスとして扱われてきたと考えられるのではないだろうか。

ところで、日本語の古典は、ずいぶん便利なことばのように思われる。私たちは古典ということばに、古来から伝わる優れた著作、というぐらゐの意味しか与えず、クラシクスもアウクトリタスも一括りにとらえているように思われるからであって、そのため、世界文学全集や世界思想体系に収められた著作を、手当たり次第、あるいは気軽すぎる気持ちで読んでいるのではないだろうか。

それはたいへん結構なことではあるが、古典はやはり長い時間、かなりの数の人の手から手へと伝承された著作なのであり、その伝承の環境というか雰囲気というか、要するにその受容の歴史さえそれ自体の内容に溶け込ませている、という見方が可能であろう。であるから、たとえば古典という語をクラシクスやアウクトリタスという語に還元し、その伝承の歴史が漂わせている暖かい、ないしは厳しい雰囲気を呼び醒まして読んでみることも必要なのだ、と私には思われる。

(B03「近現代社会と古典」班・東京大学)